＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

GCOE NewsLetter
[No.7 2008/4/22]
---

gCOE新メンバーと招聘教授の紹介
gCOE授業科目の開講について
国際研究集会若手研究報告者の公募について
大学院学生海外派遣事業について
gCOE論文賞の募集について
次回のオープンレクチャーについて
平成19年度海外派遣大学院生の調査報告
「テクスト布置解釈学原論」の要約
第7回オープンレクチャーの要約
gCOE事業推進担当者、研究員による海外出張報告

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

■ gCOE新メンバーと招聘教授の紹介

文学研究科の加納修准教授（西洋史学）と宮地朝子准教授（日本語学）が事業推進担当者として、また前澤大樹さん（英語学）が研究教育員として新たにグローバルCOEに加わりました。
また、本年4月1日～7月31日まで宮川繁先生（米国・マサチューセッツ工科大学教授）が招聘教授として本プロジェクトの教育・研究事業を担当しています。
新メンバーと宮川招聘教授のプロフィールや研究内容については、グローバルCOE のWebページで紹介していますのでご覧ください。また宮川先生の講演日程についてはWebページのほか、次号のNewsLetterでもお知らせします。

■ グローバルCOE授業科目の開講について

本年度大学院博士後期課程に入学した方からは，課程博士論文を執筆して学位を取得するにあたりグローバルCOEが開講する授業科目から「テクスト布置解釈学原論」と「テクスト布置解釈学各論」を各 2単位修得することが必

要になりました．また，これらの授業への登録はグローバルCOEプログラムが推進する2つの事業に応募する際の条件となっています．昨年度以前に大学院博士後期課程に入学した方についても，グローバルCOE授業科目に登録し履修していることが，グローバルCOE論文賞および大学院学生海外派遣事業に応募する際の条件になっています．「テクスト布置解釈学原論」については，曜日・時限とも不定期に開講される30回以上の授業の中から自分の専門や興味にあわせて15 回以上に出席し，レポートを提出することで単位を取得できます．原論と各論の開講授業一覧についてはグローバルCOEのWeb[www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp]からPDFファイルをダウンロードして確認してください．

■ 国際研究集会若手研究報告者の公募について

2008年7月19日（土）〜21日（月）に開催されるgCOE国際研究集会『日本における宗教テクストの諸位相と統辞法』（学術責任者：阿部泰郎教授）について、自らの独創的な研究成果の報告を試みようとする意欲ある若手研究者ないし大学院生の報告者を公募します（5月2日締め切り）。詳しくはグローバルCOEのWeb[www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp]から公募要領のファイルをダウンロードしてご覧ください。

■ 大学院学生海外派遣事業について

昨年度より始まったグローバルCOEプログラムによる大学院学生海外派遣事業ですが，大学院説明会でも紹介されたように，本年度から年2回募集することになりました．課程博士論文の執筆を最終的な目的として，論文執筆に必要な海外での調査をサポートするのが，この大学院学生海外派遣事業です．既にポスターなどを貼り出していますが，受付期間内に計画書を作成して応募してください．
受付期間：2008年4月23日（水）〜2008年 5月7日（水）16時半
提出先：グローバルCOE事務室［講義棟131室］宛に郵送または持参
募集要領はグローバルCOEのWeb[www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp]に掲載しています．

■ gCOE論文賞の募集について

こちらも昨年度から募集を始めていますが，大学院学生海外派遣事業と並んで博士後期課程の皆さんの課程博士論文執筆を支援すべく，グローバルCOEプログラムが行っている事業です．大学院説明会に先立って行われた授賞式で気づいた方も多いと思いますが，グローバルCOE論文賞に選ばれると副賞として10万円分の研究費が支給されます．皆さんが執筆する認定論文を念頭に募集時期を設定していますので，認定論文の執筆に全力を注いでもらい，力作をもって論文賞へ応募していただきたいと思います．本年度の認定論文の教務学生掛への提出期限は2008年8月29日(金)と2009年2月20日 (金)に決まっていますので，その前後7日程度をグローバルCOE論文賞への応募期間として設定する予定です．詳細が決まればその都度このメーリング・リストとWebおよび掲示でお知らせします．グローバルCOE論文賞への応募についても海外派遣事業と同じくグローバルCOE授業科目への履修登録が条件になっていますので確認してください．

■ 次回のオープンレクチャーについて

2008年5月21日（水）18：00～　国際センタービル15F GCOEオフィス
講演者：松澤和宏（文学研究科教授・フランス文学）
題目：「ソシュールと解釈学」

■ 平成19年度海外派遣大学院生の調査報告

平成19年度のgCOE大学院学生海外派遣事業によって３名の大学院生が海外調査を行いました。前回ご紹介した吉田早悠里さん（比較人文学）に引き続き、鈴木球子さん（仏文学）と三好俊徳さん（比較人文学）の海外調査報告を掲載します。

文学研究科博士後期課程１年（仏文学）　鈴木球子

18世紀フランスの作家、サド侯爵はその美徳がゆえに不幸に陥る娘、ジュス

ティーヌの物語を題名や内容を少しずつ変更し、新たなエピソードを加えながら、繰り返して書き続けている。第一版『美徳の不運』、第二版『ジュスティーヌまたは美徳の不幸』、第三版『新ジュスティーヌ』の三つの版は、よく知られている。

今回の調査(2008年3月9日から3月22日までの、約２週間)では第一版『美徳の不運』以前に執筆された「最初の構想」の草稿版を対象とし、「最初の構想」と第一・二・三版とを比較し、テクストの生成過程を明らかにすることを目的とした。フランス国立図書館で草稿版の読解・大まかな翻訳を行った。その結果、「最初の構想」から第一版への幾つかの変更箇所が明らかになった。また作中人物ブレサック侯爵の挿話に、「最初の構想」にはなかった宗教的な言葉が、版を重ねるうちに書き加えられていく過程に非常に興味を抱いた。

パリ滞在中に、ソルボンヌ大学の18世紀リベルタン文学のミシェル・ドロン教授にお会いし、その指導を仰ぐことができたのは、大きな収穫であった。サドとフランス革命、宗教との複雑な関係や、「近代性」という言葉の定義の重要性などについて、アドバイスをいただいた。

リヨンでは印刷博物館を訪れた。15世紀以降の印刷機や書物などを実際に見ながら、特にグーテンベルク以後の印刷・出版の歴史について学んだ。また、ここでアシニャ紙幣（フランス革命期に反カトリック政策に伴い、没収された聖職者の財産を担保として発行された不換紙幣）の実物を見ることができたのは、予想外の喜びであった。

いただいた助言を活かし、また今回の調査で得た資料を更に丁寧に読み込んでいくことで、サドのテクストの生成過程や、テクストと宗教との関わりを明らかにしていくことができると思う。

文学研究科博士後期課程３年（比較人文学）　三好俊徳

2008年３月17日にロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（SOAS）におけるワークショップ「日本宗教研究：フィールドワークと文書からの新たな発見」に参加し、「Buddhist History as Sectarian Discourse: Historical Manuscripts from the Shinpukuji Archives（邦題：真福寺の歴史テクスト–宗論としての仏教史叙述）」と題して英語による研究発表を行った。

本発表では、名古屋市真福寺大須文庫に所蔵される、史書の形式で行われる仏教史叙述テクスト（それを仏教史書とする）の内容の検討をとおして、

中世において仏教史書はどのような意味をもっていたのかを考察した。まず、真福寺に所蔵される仏教史書の紹介と内容の分析を行った。そのうえで、これらの書物がなぜ真福寺に集められたのかという問題を提起し、その理由を仏教史叙述が中世寺院のどのような活動と関わるのかを分析することで考察を行った。ここでは寺院間の抗争と仏教史書との関係を考察し、仏教史叙述という行為は、寺院の自己主張と関係が深いことを指摘した。そのことから、仏教史書というテクストは文庫のなかで、歴史書として単独に価値を持つのではなく、寺院間の相論や法談に関係するテクストと関係するテクストとして価値を持つということを明らかにした。すなわち、中世において仏教史書は、諸テクストとの関係のなかで意味を持つテクストなのである。

その後、質疑応答で多くの質問やアドバイスをもらい、意見交換を行った。中世の特徴的な世界観である三国観などのテクストに内在する中世思想について、テクストが生成されるときの依拠資料との関係について、また、寺院における諸テクストとの関係について議論が行われた。そのことを踏まえて、今回の発表の内容と今後の調査・研究をより深く確実なものにできると考える。

その後、イギリスとアイルランドに現存する宗教テクストについて閲覧や調査を行った。オクスフォード大学ボドリアン図書館においては、日本仏教関係の所蔵資料、特に『釈迦の本地』などの仏教と関係が深い奈良絵本や明治期の仏教学者南条文雄の直筆資料を閲覧し、日本館館長のイズミ・タイトラー氏と意見交換を行った。ダブリンのチェスタービーティ・ライブラリィでは所蔵される奈良絵本を閲覧するとともに、「奈良絵本・絵巻国際会議」に参加した。特に、テクスト収集の過程や海外における日本関係資料研究の現状について興味深く伺った。これは、在海外テクストを実見できる機会であったとともに、テクスト収集および受容について、海外における日本関係テクスト収集から考えることができる機会となった。

■「テクスト布置解釈学原論」の要約

重見晋也准教授「解釈学とテクスト」(2008年4月15日・16日)

本講義では，テクスト研究と解釈学の関係を概観するとともに，H. G. ガダマーの解釈学を対象としてその基本的な考え方を概観した．テクスト研究において解釈学はテクスト構造の分析を目的とする詩学の対極にある研究方法として位置づけることができる．ハイデガーに始まる現象学的解釈学は聖書

解釈学にまでさかのぼる解釈学を批判的に継承したものであり，理論的には解釈学的循環を措定する点において共通している．解釈学的循環をどのようなものとして考えるかによりさまざまな立場があるが，ガダマーは知の蓄積が解釈者の理解を基礎づけており，テクストと知の蓄積との間の循環が解釈を生み意味作用を生むと考える．知の蓄積には社会的性質を持つ「権威」と個人的な経験としての「先入見」があり，それぞれが過去と現在の地平として解釈者の中で融合することで解釈学的意味作用が構成されていると考える．

■ 第7回オープンレクチャーの要約

2008年４月16日（水）18時〜19時
阿部泰郎教授（文学研究科・比較人文学）
題目：「宗教図像テクスト複合としての聖徳太子絵伝」
日本独自の説話画として永い歴史と豊富な作例を有する聖徳太子絵伝は、聖徳太子の伝記という文学テクストを、絵解きという音声–語りを介して表象し意味付ける機能を蔵した図像テクストである。この太子絵伝は、中世を中心とした各時代の仏教の儀礼空間において、本尊としての太子尊像と、太子講式などの儀礼テクストにより太子を祀る祭式を営む、各宗派の唱導と教化の一環として、芸能的性格をもって運用された。太子絵伝は、いわゆる“太子信仰”を構成する諸位相の要素が重層し連携した接点の媒体として成立し、機能するものであった。その機能を、共時的な構造と通時的な変遷の両面から明らかにすることを通じて、それらの全体を広義の宗教テクストとして認識する必要があることを提起した。

■ gCOE事業推進担当者、研究員による海外出張報告

NewsLetterではグローバルCOEの研究・教育事業のために海外出張を行なった事業推進担当者および研究員の報告書を逐次掲載していきます。

佐藤彰一（gCOE拠点リーダー・西洋史学）

カナダのバンクーバーで開催された第83回アメリカ中世学会年次大会（the

Annual Meeting of The Medieval Academy of America）に出席するために、4月2日から7日まで出張旅行を行なった。この会議は同時に第42回太平洋中世学会（the Medieval Assoication of the Pacific）も兼ねていて、バンクーバーが州都であるカナダのブリティシュ・コロンビア州の中世研究者と、全米の中世研究者、それにフランス、イギリス、ドイツから参加した中世学者を含め、3~400人ほどの規模の集会であった。この数を多いと見るか、あるいは意外に少ないと見るかは別にして、日本の場合とは異なり、中世を専門にしている歴史家だけでなく、文学、思想・哲学、美術など多様な領域の専門家を糾合し、総合的な中世学を指向しているのがアメリカの中世研究の伝統的な特徴である。

会期は3日から5日までの3日間で、会場に充てられたのはウォーター・フロントに近いダウンタウンにあるハイアット・リージェンシー・ホテルの２階と４階と34階合わせて10ホールで、３日間で46のセッションが開催され、約140の報告とこれをめぐる質疑が交わされた。

オープニング・アドレスは、英国から招待されたオクスフォード大学オールソールズ・カレッジ、チーチェル講座教授のクリス・ウィッカム氏が「The Culture of the Public: Assembly Politics and the Feudal Revolution」と題して行なった。これは学問的にもまたパフォーマンスとしても、満座の聴衆を唸らせる見事な講演で、さすが目下世界の西洋中世史家ではナーバーワンの世評を得ている同氏の名声もなるほどと思わせる出来栄であった。

46のセッションの中には聖人伝テクストの「本歌取り」ともいうべき現象を主題にした「テクストの略奪。聖人伝テクストの構築における古いテクスト影響」や「中世の語り。テクストとイメージ」、「中世の文字テクストにおける本文の余白の相互作用」、「法か、それとも文学か。アングロ・サクソン法史料とそのコンテクスト」など、われわれの研究教育テーマと密接に繋がる分科会があり、多くの興味深い報告が聞けたが、ここで詳しく紹介するスペースがないのは残念である。

ハイアット横の脇道は桜の並木であるが、私が到着したときすでに満開で、道行く人々は携帯電話のカメラで美しい薄桃色の爛漫のさまを写していたが、帰路空港に向うべくホテルを後にしたときも、その漲る容色の力にはまだ聊かの衰えも感じられなかった。

鎌田隆行（gCOE事業推進担当・仏文学）

2008年3月11日〜24日（帰国日は翌25日）にフランス・パリに滞在し、グローバルCOEプロジェクトに関連するバルザックの作品生成論について以下の研究・教育活動を行なった。
1.執行部会メンバーをつとめている国際バルザック研究会(Groupe International de Recherches Balzaciennes)の運営会議（3月22日、パリ第7大学グラン・ムーラン校舎）に出席し、同研究会代表ニコル・モゼ氏（パリ第7大学名誉教授）の司会のもと、日本バルザック研究会の活動の近況を報告するとともに、2010年に開催予定のバルザック作品生成論に関する国際シンポジウムのプログラムおよび運営方法について他のメンバーと討議を行い、特に日仏の若手研究者の参加について意見交換を行った。
2.フランス学士院図書館において、ロヴァンジュール文庫所蔵のバルザック『セザール・ビロトー』（1837）の作品生成資料（草稿、校正刷りおよび初版本）の整理・解読を行い、本作品に見られる『セファリック油』の広告文の挿話が草稿段階から版本に至るまでいかに展開し、変容していったかを当該箇所の転写版（翻刻）を作成しつつ跡付けた。分析の結果、文面の変更のみならず、青年期の印刷業の経験から印刷技術に通暁していた作者自身がページ組や活字体の指定を緻密に行っている点に特徴があることが判明し、作者が6回に及ぶ校正刷りでの修正作業を通じて仕上がりの状態（空間的配置）を確認しながらこれらを逐次調整し、また校正紙という眼前の印刷イメージの視覚性に触発されて時に極めて大胆な加筆や置換をもたらしながらテクストの空間的構築を行っていったことを解明した。以上から、他の作家であれば編集者や出版者に委ねている印刷工程上の作業をも自ら統括し、またそのプロセスを通じてテクストの変容を着想しているバルザックの作品制作の独自性の一端を浮かび上がらせることができた。本調査の分析結果については今後のgCOEの研究事業の場での報告を予*
閧ている。

金銀珠（gCOE研究員・日本語学）

2008年2月15日（金）から2月17日（日）まで，2泊3日間，韓国のソウルに位置する「国会図書館」（1 Uisadangno, southwest Seoul）を訪問し，研究に必要な資料を収集した。
交通便は中部国際空港と韓国のインチョン国際空港の往復で，アジアナ航空（韓国）を利用した。また，現地での宿泊は訪問先に近いホテル（kobosu

hotel：+82-2-782-9092）を利用した。
韓国国立国会図書館は，韓国最大の図書館として，1945年以降韓国の大学に提出されたすべての修士・博士論文、雑誌などの定期刊行物，専門書籍等を所蔵している。報告者が収拾した資料は，中世韓国語の連体修飾に関する雑誌論文および韓国大学に提出された博士論文である。この資料は，現在進行中の日本語の属格主語に関する研究との対象研究に使用する。より具体的にいえば，日本語には「髪の長い女」「雨の降る日」のような名詞を修飾する構造において属格主語「の」が現れることがある。韓国語の属格を表す助詞には [ui]がある。日本語のように名詞を修飾する構造において属格が主語を表示する例は，現在の韓国語にはまれに起こる現象であるが，中世韓国語ではより頻繁に行われていたことが知られている。属格主語は言語的にみれば，さほどまれな現象であるとは言えないが，韓国語と日本語は構文構造が近似しており，日本語の属格主語が使われる範囲も韓国語と同様，次第に狭まれてきていることが知られている。したがって，日本語の属格主語の変遷に関する言語内的要因の解明に，韓国語の変遷は示唆的な材料になると考えられる。本調査の分析結果については，今*
繧7GCOEの研究事業の中で論文化していく予定である。

永田道弘（gCOE研究員・仏文学）

フランス人作家レーモン・ルーセル（1877–1933）の執筆による小説『アフリカの印象』の手書き原稿およびタイプ原稿の一部を転写。作品が成立するプロセスとしての前テクストを分析対象とすることは、本プログラムが掲げる「テクストの布置構造」という観点からいえば、従来の決定稿に依拠した作品解釈を相対化し、より広範な意味生成システムとしてのテクストへのアプローチを可能にするものといえる。これはルーセルの『アフリカの印象』の場合にもあてはまる。ミッシェル・フーコーらが試みてきたルーセルのテクストのフォルマリスト的解釈は、この作家を歴史の闇から救い出した意義は少なくはないが、現在ではその発想への呪縛がルーセル研究にマイナスに作用しているといえる。『アフリカの印象』の生成プロセスをみれば、フーコーらが主張するように、言語遊戯に類似した抽象的論理だけを頼ってルーセルが小説を書いたわけではないことが判明する。今回のフランス国立図書館での調査においては、以上の方向性で研究を深化させることができただけでなく、広義の引用関係としての間テクストの視点を導入することで、一つ

の作業仮説—同時代のアフリカの表象に対

してルーセルが加えた変成作用の特異性が、西欧植民地主義のイデオロギーを転倒させる契機を孕んでいる—を打ち立てることができた。今後は、転写した草稿をもとに、この仮説の証明を試みていきたい。

次回のメール版NewsLetterの発行は2008年5月中旬を予定しています。

・・・…━━━…・

GCOE「テクスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration
http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/

NewsLetter No.7
発行：GCOE編集部

編集担当：鎌田隆行

Copyright(C) 2008 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

・・・…━━━…・

gCOE_profs mailing list
gCOE_profs@gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp
http://svr.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/mailman/listinfo/gcoe_profs